

# クイズーゼン

第16号

雑草という名の  
草がなによろに  
ムダモシという名の  
もまたないんだよ  
なあ

みつお  
研

# CRAZY JANE Vol.16

## CONTENTS

表紙イラスト(日本の巨匠パロディシリーズ②)	マヌルねこ	1
玉蟲読書新聞	玉蟲	3
玉蟲の勝手に Thik Pad	たまめる	7
たまには私も考える 書評『女たちの静かな革命』		
デブ猫の脱ひ ③ マヌルネコ	荻野はるか	12
ねこいるかのタイ旅行記	マヌルねこ	14
はたらくをぢさん—ユーモアじじいの巻—	ねこいるか	15
	マヌルねこ	16
From Editor Jane		

クレイジー・ジーン、司教と語る

W. B. イエイツ 訳/玉蟲

あたしは道で司教に会った

そうしてあれこれしゃべった

「おまえの胸も今じゃしなびて平べったい

じき血管もひからびよう

襪らしい豚小屋を捨て

天の館で暮らすがいい」

「綺麗と穢いは身内同士

綺麗には穢いが要るんだよ」とあたしは叫んだ

「友だちはいなくなっただけど、それは

お墓もベッドも打ち消せない真実さ

肉体の低みに落ち

心の誇りで学びとった真実さ」

「女は恋に夢中でも

つんとお高くすまし顔

でも愛の神が館をお据えになったのは

排尿排便するところ

なんだって、割れてはじめて

まるごとひとつになれるのさ」

# 玉蟲読書新聞

玉蟲

◆ミック・ジャクソン『穴掘り公爵』（小山太一訳、新潮社）

何物かに対する強烈なオブセッションが、じわじわと狂気へ高まっていく、という話に妙に惹かれる。映画でいえば、ポランスキーの『リバルション—反撥—』や、ピーター・グリーナウェイの『ZOO』、クローネンバーグの『戦慄の絆』といったあたりだ。『穴掘り公爵』も、そうした話のひとつである。公爵が美しい頭部穿孔の道具に魅せられて盗んでしまう（おまけに後に実際に使ってしまう）くだりなど、まさにクローネンバーグではないか。ちなみに作者ミック・ジャクソンは、一九六〇年生まれの英国の短篇映画監督で、小説ではこの作品が長篇デビュー作である。

『穴掘り公爵』は、十九世紀に実在した英国の公爵をモデルにした小説である。領地内にくねくね伸びる謎の地下トンネルを造ったという公爵の奇人ぶりに、作者は心惹かれたらしい。小説の老公爵もまた、自分の屋敷から放射状に広がる立派な地下トンネルを造らせる。何のためかははっきりしない。

い。実用的な目的のためというより、むしろ精神的な必要性から造られた、幻想の空間というべきかもしれない——たとえば、フランスの郵便配達夫フェルディナン・シュヴァルが造りあげた、あの奇怪な建築物「理想宮」のように（もつとも、シュヴァルの場合、裕福な公爵と違って、大量の職人を雇える身分ではないから、文字どおり自分ひとりの手でこつこつと築きあげたわけだが）。

物語は、主として老公爵の日記のかたちで進み、時折り、召使らによる客観的な証言が効果的に挿入される。孤独な公爵は、老いによる肉体の衰えと苦痛を鋭く意識しつつ、日々さまざまな思索に耽り、断片的に甦る記憶を反芻しては、失われた何かを求めて邸内をさまよう。英国風のひねったユーモアに満ちた筆致の中から浮かび上がる、公爵の奇人変人ぶりと奇行の数々が楽しい。

ところが、公爵の奇行が高じてしだいに狂気へと近づくにつれ、物語は凄みを帯びる。公爵は、精神の解放を目指して、特殊な器具で己の頭蓋骨に穴を開けるに至る。巧みに張られた伏線が、結末へ向けて徐々に収束し、公爵は長らく失われていた幼い日の痛ましい記憶をついに取り戻す……。

結局のところ、公爵の地下トンネルは、失われた記憶へ通じる無意識の通路、肉体という牢獄から精神を解放させる脱出路にほかならない。トンネル掘りも頭部穿孔も、同じ解放への衝動に駆られた行為なのだ。公爵は、領地だけでなく、

ついに自分自身の頭蓋骨にトンネルを開けただけのことだ。

「精神を解き放ち、皮膚と骨の束縛から自由に漂わせることができれば素晴らしいだろう。他の精神たちと集い、意思を通わせることができれば……（中略）……余が求めるのは超越である。もっとも深い部分を解き放ち、空中に飛翔させることだ。肉体の押し付けるみじめな隔絶感、いまや余はそれを忌むのである。余が欲するのはささやかな光を導き入れることだ。世界にささやかな光を放つことだ」

老いさらばえていく肉体へのオブセッションに囚われた公爵は、肉体と精神の痛みからの解放と超越を希った。公爵の無垢な精神は、地下トンネルと頭蓋の穴に導かれ、無垢なる自然のうちに束の間の安らぎを見出す。だが、同時に無意識の世界に似たその原始の自然の中には、公爵の失われた暗い記憶もまた潜んでいた。真実を知ることが、時に取り返しのつかない悲劇をも招く。

同じ新潮クレスト・ブックスから出ているキャスリン・ハリソン『キス』（岩本正恵訳）とフランク・マコート『アンジェラの灰』（土屋政雄訳）も良い本なのでお勧めしたい。このクレスト・ブックスのシリーズは、フランス装に似たセンスの良い軽やかな装丁が好もしく、本文に一味違う精興社の書体を使っている点も高く評価できる。

#### ◆平田オリザ『演劇入門』（講談社現代新書）

ここ数年、平田オリザ率いる劇団「青年団」の芝居をよく観る。これまで観た中でとくに良かったのは、『東京ノート』と『火宅か修羅か』。十一月に観た、松田正隆作、平田オリザ演出『夏の砂の上』も忘れたい傑作だった。夏の長崎を舞台にしたこの芝居は、妻に去られた失業中の男とその姪の暮らしを軸に、彼らと周囲の人々との関わりを淡々と描いたものである。会社がつぶれ、家族が壊れ、確かなものなど何もないしらじらとした廃墟の中で、誰もが深刻な人生の痛みを抱えて生きている。そこには、今の、私たちの生活に通じる「息苦しさ」が、はるかに凝縮したかたちでさらけ出されている。チェーホフを思い出す。絶え間ない喪失。満たされることのない人生。身を切るような痛み。生きていくというのは、もともとこういうことではなかったか。

平田オリザの芝居を観たあとは、いつも、よくできた短篇小説を読んだような気分になる。深く、複雑な人生の断片が、あまりにも繊細かつ鮮やかに切り取られているからだ。彼の演出は、淡々として、演劇くささがなく、独特の「リアルさ」をそなえているが、いわゆるリアリズムとも違う。その「リアル」は、舞台の上で初めて実現可能な「リアル」であり、きわめて緻密な方法論によって人工的に構築されたも

のである。現実の上手な模倣Ⅱ「リアル」ではないことを、平田オリザは誰よりもよく認識している。

『演劇入門』は、平田オリザが一般読者向けに書いた、「戯曲を書くこと、演劇を創っていくことのためのハウ・トゥー本」である。私は、別にこれから戯曲を書こうという気などはさらさらない（そう言えば私は小学生の時なぜか『皿屋敷』をパロディ化したお笑い芝居の台本を書いて、それをクラスで上演したことがあったが、今考えるとなぜあんなことになったのだろう）。しかし、この本を読むと、平田オリザの演劇観がよくわかるし、ひいては、自分がなぜ青年団の芝居に通うのかも見えてくる。たとえば、平田オリザはこんなふうに書いている。「だが、演劇は、ある表現の構造を通じて、このような、日常生活では見落としてしまう、または見えないふりをしてしまう人間の微細な精神の振幅をも顕在化させるのだ」

そう、私が「優れた短篇小説の読後感」と同じものを感じるのには、こうした点なのだ。もちろん、すべての演劇が「精神の振幅」を描くわけではない。文学と演劇のどちらがその点で優れているかなどと問う必要もない。私はただ、今を生きる人々の、眼に見えない精神の振幅、心の在りようを明らかにする、優れた表現に出会いたいだけだ。

また、「話し言葉」を書くことの難しさ、あるいは、平田オリザによれば「残念ながらもまだ対話の構造を有していな

い」とされる日本語で、対話を成り立たせる困難をめぐる考察も、たいへん興味深く、私のようにものを書く人間にはとりわけ参考になった。

#### ◆群ようこ『尾崎翠』（文春新書）

実を言うと、先月、角川文庫に入った『贅沢貧乏のマリア』を読むまで、私は群ようこの本を読んだことがなかった。『無印OL物語』といった類の書名から、何やら今風の軽薄な文章が予想されて、読む気がしなかったのだ。しかし、実際の群ようこの文章は、意外にも軽薄ではなかった。森茉莉を取り上げた評伝エッセイ『贅沢貧乏のマリア』にせよ、『尾崎翠』にせよ、物書きである著者の、女がひとり生きていくこと、女がものを書くことへの切実な関心が滲み出ている。群ようこという人は、周囲から変わり者と見られようとも、自分固有の美意識と物差しをもって、他人に媚びない生き方を貫く女性が好きなようだ。

群ようこが作家尾崎翠の人と作品を愛情こめて紹介する『尾崎翠』は、恰好の尾崎翠入門書だ。私はこれを読んで、今まで何となく気になりながらも読まずにきた尾崎翠の作品が本気で読みたくなり、早速ちくま日本文学全集の尾崎翠の巻を買いに行った。

尾崎翠は、一八九六（明治二十九）年、鳥取県生まれ。高等女学校卒業後、代用教員をしながら雑誌に短文の投稿を始め、将来文学で身を立てるつもりで、二十二歳で上京。日本女子大に入学するが一年足らずで退学し、文学に専念する。東京を足場に、貧しい暮らしの中でこつこつと書いた作品を『婦人公論』『女人芸術』等に発表し、徐々に認められていく。三十四歳の時、代表作となる小説「第七官界彷徨」を発表して好評を博すが、翌年、かねて常用していた頭痛薬ミグレンの中毒による被害妄想や幻覚症状が悪化し、長兄の手で鳥取に連れ戻される。三十五歳で、作家としてまさにこれからという時のことだった。十歳年下の恋人とも、この時別れたまま二度と結ばれることはなかった。帰郷してからは、健康を取り戻したあとも、ほとんど作品を書かず、東京との音信も絶ち、母を看取り、甥や姪の面倒をみながらひっそりと暮らした。生涯独身のまま、七十四歳で亡くなった。

尾崎翠は、男っぽくさっぱりした性格で、嘘やお上手の言えない人だったという。人づきあいが極端に苦手で、一時出版社に校正係として勤めた時も、二、三か月しか続かなかつた。一人か二人の親友を除けば、友だちはほとんどなく、文学の師もなかった。自分を売り込むのも苦手で、なかなか売れるようにならなかつた。どうしようもなく真摯で不器用な人である。私自身は「さっぱりした性格」というにはほど遠いし（むしろいやなことは絶対忘れず、根にもつタイプだ）。

編集者を数年やったこともあるから、翠ほど人間関係に不器用というわけでもないが、一脈相通するものがあって身につきまされる。

親の仕送りや友人の援助で貧乏暮らしをしながら、将来の見えぬまま、不安に苛まれたつづつ、ものを書きつづける、二十代から三十代半ばにかけての翠の生活も、とても他人事とは思えない。それだけに、三十五の若さで、仕事も恋も人生も、根こそぎ断ち切られたむごさに胸が痛む。それにしても、なぜ翠は筆を折ってしまったのか。本当に書かずにいられぬものがあれば、郷里で書きつづけることもできたのではないか。なぜ東京でなければ書けなかつたのか。「書きたい」気持ちをおそらく最後まで諦めきれぬまま、何ひとつ書けなかつた、書こうとしなかつた、彼女の心はどんなものだったのか。その沈黙の重みをめぐっては、憶測する以外になく、『尾崎翠』も納得できる解答を与えてくれるものではない。数は少なくとも、真に時代を超えて残るあれだけの傑作をものしたのだから、それでいいじゃないか、と締めくくれば、少しは救われた気になるのは確かだが、書けなかつた後半生の無念さが、心に残ってならない。

遂に実現!! 玉蟲+マヌルねこの(砒素)華麗なコラボラシオン!

# 玉蟲の勝手にThinkPad

## —①パソコン、ゲットだぜ!の巻—

◆このエッセイは、マヌルねこが玉蟲の思考に同一化する『エレメント・オブ・玉蟲\*1』方式によって書かれました。



こういうのを世間一般  
では『代筆』と  
云います。

……つた、ぬゆまにかかーなこうボた……

byたまぬる

……まず断っておかなければならないのは、このダサイタイトルは私がつけたのではないということである。そう、三号連続して原稿を落とした罰として、タイトルの決定権を剥奪されてしまったのだ。もちろんこんなタイトルを考えつくのはマヌルねこさんしかない。この他に私に許された選択肢は『渚のThinkPad』『ThinkPad虎の目大冒険』で、まるで自民党の総裁選(どれを選んでもろくなものではない)であった。

これまで私はパソコンなんて別にいらさない、今使っているワープロで十分だと思っていたのだが、翻訳業を志すようになってから、いろいろと調べ物をせねばならずCD-ROMドライブが欲しくなってきた。また、フロッピー原稿受け渡しにおける互換性の問題も出てきたのでパソコンの購入を思い立ったのである。しかし私の部屋は狭い上に本だらけであり、机の上も本や郵便物や塵芥の山で、とてもデスクトップ型を置けるスペースはない。それにブラウン管ディスプレイも目に悪いし電磁波が多く出るので嫌だった。私には最初からノート型パソコンしか選ぶ余地はなかったのである。

それではどこのメーカーにするか。まず東芝とパナソニックは工場近隣の地下水を汚染しており論外。三菱は軍事産業なのでパス。富士通は故障が多いという噂を聞いた。NECは初めちよつといいかなと思っていたが、防衛庁汚職に関わっていた上、会長の態度が胸くそ悪

かったので除外。ソニーはあの紫色が気に食わない。シャープの薄いベージュ色は汚れが目立ちそうだ。日立やサンヨーは野暮ったい家電メーカーのイメージがある。……このようにしてパソコンの性能とは無関係なところで選択が、いや、選択肢の縮小が行われていった。要はワガママなのだが、右を向いても左を向いても選択の余地がない玉蟲である。しかしいかんせんまだまだ情報不足だ。そこで、最近会社でパソコンをいじついで、ちょっとパソコンを使える気になっているマヌルねさんに電話で相談してみた。

「Macがいいよ」

いきなりである。会社のパソコンはWindowsで、Macにはパソコン売り場でしかさわったことがないのにこういうことを言う。

「どうしてMacなの」

「かつこいいじゃん。Think different、クレージーでクリエイティブな人のための道具だぜ。人間味があるし、デザインもいいしさ。今度のG3プロセッサなんか、PentiumⅡを遙かに凌駕するスピードだし。そうそう、こないだ映画館でやっていたPowerBook G3のCMでは、Pentium搭載のノートパソコンをロードローラーで片端から潰していてナイスだったぜ。PowerBook G3にしろよ。最上級機種なんかノートなのにHDDが8GB……」

雑誌やカタログで得た知識をそのまま受け売りするマヌルねさんの話にうんざりしながらも、Appleはシェアは低いけど、いやそれ故に、自分をクリエイティブな少数派だと思っている人の自尊心をくすぐるイメージ戦略に長けていると思った。まあ、デザイナーやイラストレーターたちの間では今でも支持率が高いところを見ると、確かにヴィジュアル面での使いやすさ、性能の優秀さは否定できないだろうが、私がやりたいのはお絵描きではなくて翻訳なのだ。

「だって、Macじゃ使えない辞書ソフトもあるんだよ」

「大丈夫だ。MacでWindowsを読むためのソフトもあるそうだし」

「翻訳学校でMacを持っている人がいるけど、使にくい、Windowsに買い替えたいって言ってるよ」

「それは使い方が悪いか、機種が古いんだ。最新のG3なら大丈夫だ」

「MacからMS-DOSで落としたフロッピーが、家のワープロ(MS-DOS可)で読めなかったんだよ。やっぱりデータのやりとりで不安があるからね」

「だからそれは使い方が悪いんだ。気にするな」  
ろくに調べもしないくせに、根拠のない自信に満ちた発言をするのはマヌルねさんの得意とするところだ。彼の「大丈夫だ」「気にするな」ほどこいかげんで当て



にならないものはない。

「何だ、日頃から他人と同じは嫌だとか言ってるくせに、結局長いものには巻き巻きされるのか。周りにはみんなWindowsでも、自分だけは断固Macを使うのが心意気ってもんだらう。見損なつたぜチンポ！（意味不明）」

遅ればせながら相談相手を間違えたことに気付いた私は、自分で『ベストPC』を買って調べることにした。その結果、IBMのThinkPadが私の好みに一番合っていた。他社の製品よりも濃いブラックボディでデザインは渋く、丈夫でキータッチもいらしい。また、附属ソフトは自分で選択してインストールするという、一見不親切なようだが実は合理的なところも気に入った。日本のメーカーのように最初から色々インストールされていると、年賀状みたいな大して使わないソフトのためにHDDの容量が減ってしまうという無駄があるのだ。マヌルねさんにThinkPadにしようかと話すと、「IBMだってアメリカの軍事産業じゃねーのか？」と嫌がらせを言われたが、デザインが渋いからいいのだ。私はワガママなのだ。

嫌がらせを言いながらも、マヌルねさんは新宿のカメラ店街や秋葉原の電気街にThinkPadの情報収集に出掛けてくれた。「忙しい中を、君のためにわざわざ行つて来てやったんだからな」とものすごく恩着せがましく言うのだが、本当は自分がパソコンやカメラや

オーディオを見たくて出掛けているだけで、私の用事はそのついでであることを私は知っている。こうしてマヌルねさんが収集してきたThinkPadのカタログを見ると、私の目当ての機種（385XD）もあるのだが、予算を大幅に上回る高級機のものまで混じつており、しかもThinkPadのカタログの間にMacのカタログをそつと挟み込む姑息な細工も忘れていない。結局こいつは自分の趣味だけで情報集めしており、私の希望のことなどほとんど考えていないらしい。その疑念は次の会話で明らかになる。

「やっぱり、385XDよりも600の方がいいよ。薄型でかっこよくて触った感じもいいし、PentiumII300MHz搭載、メモリーは最大288MB、HDDは5.1GBだぜ」

「確かにそうだけど、600は一番安いタイプでも私の予算を十万円以上もオーバーするじゃないの」

「ちょっと無理してでも高性能機を買っておいた方がいいよ。後で色々やりたくなくなってから後悔しても遅いぞ。メモリーやHDDに余裕があればIllustratorやPhotoshopも快適に使えるぜ」

「だからお絵描きはしないってば」

「おおっ。こっちの770Xはもつとすごいぞ。DVDR-ROMドライブ搭載でHDD8.1GB。これにしろよ。一生もんだぞ」

「……（大方予想はつくが、一応訊いてみる）いくら

するの、それ……」

「七十五万くらいかな」  
予算の三倍近い。おまけに常識から言っても一生ものパソコンなんてある訳ないだろう。パソコンに限らず、「ハイエンドマシン」とか「レファレンスモデル」とかの「ハイスペック」を見ると、自分の懐具合も顧みず夢中になるマヌルねこさんの精神年齢はほとんど子供である。しかも先日までMacMac言っていたのにこの変わりようはどうだろう。

結局私の心の中ではほぼ385XDに決まり、後は店頭で実物に触れてみてから購入することにした。そして十月十日の体育の日、私とマヌルねこさんは東京都写真美術館で『ウジエーヌ・アジエ回顧展』を見た後、秋葉原へと繰り出した。マヌルねこさんを連れて行ったのは、私がパソコン店に全く不案内なこともあるが、あわよくば私の家までパソコンを運ばせようという目論見からだった。マヌルねこさんはこの期に及んでもまだ「もうMacは候補にはないのか？」と訊いたり、知らず知らずのうちに人をMac専門店に導こうとするなど狡猾い手段に出たが、私の決意がロバのように頑固なことを悟って浚々ThinkPadのある店に足を向けたのだった。ただ、マヌルねこさんもオーディオ店やカメラ店ほどはパソコン店に詳しくないらしく、会社の人から聞いたという『ツートップ』という店に最初に入るとゲームソフトと自作用パーツしかないマニアな店で、女

性は私だけ、客層は漫画専門店と共通するようなムサイ兄ちゃんばかりであった。どうやらいくつかあるうちの違った店舗に入ってしまったようだが、他の店舗の案内を見ても『フィギュア』とか『同人誌』とか言う文字が散見され、さらに激んだ客層を予想して軽い吐き気に見舞われた我々は素直に大手の「L A O X パソコン館」へと向かったのであった。

そして店頭で本命の385XDとその後継機と目される380Z、さらに上級機の600に触ることができた。マヌルねこさんは「600に触ったら絶対600にしたくなるぞ。385XDに決めているなら600には触らないことだ」などと誘惑的なことを言っていたが、それほどの差を感じることはできなかった。私はあまり迷わずに385XDを購入した。上述のようにマヌルねこさんに運んでもらおうと思っていたのだが、箱を見せてもらったらけっこう大きかった上、祭日で人も多かったので結局送ってもらうことにした。その後急に夕立ちがあったので、虫が知らせたのかもしれない。

こうしてめでたくThinkPadをゲットしたわけだが、まだ何か足りない。そう、プリンタである。二人ともパソコン本体の情報収集に夢中でプリンタのことを忘れており、プリンタのカタログを集めたのはパソコンを買う当日というていたらくであった。

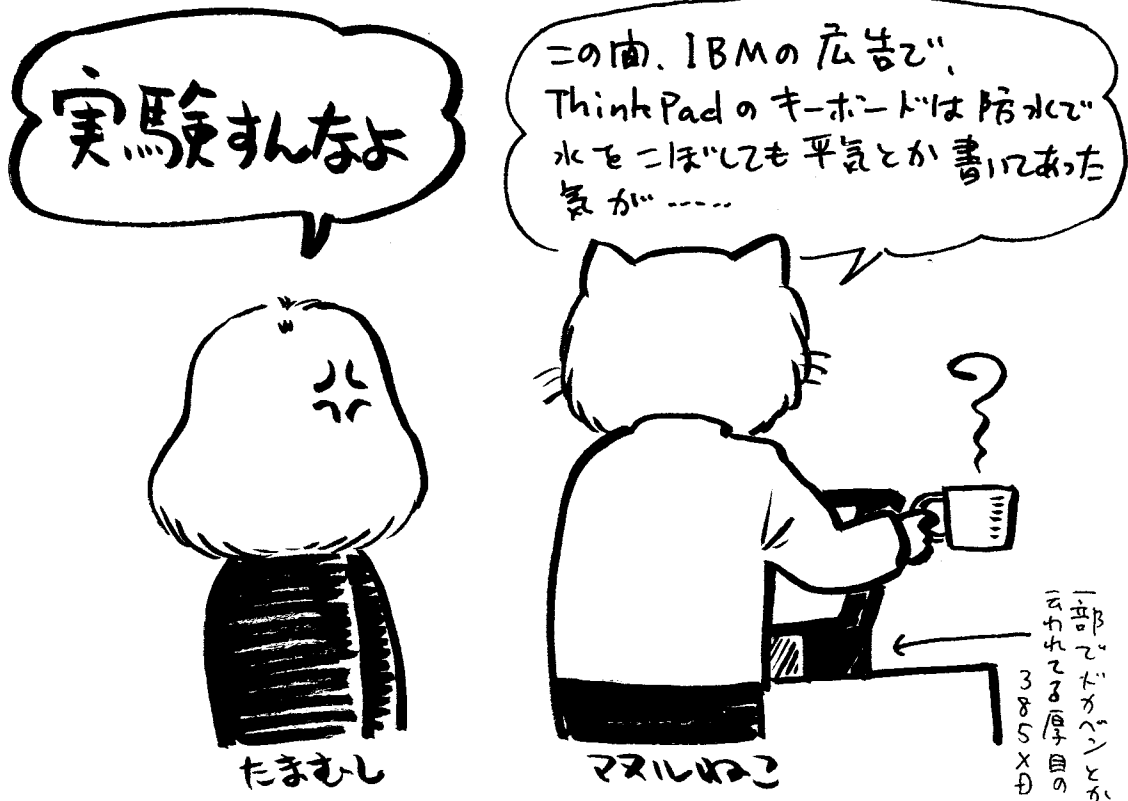
(つづく)

(追記)

私の大学時代の友人も今年の五月にThink Pad 535Xを購入していた事が判明した。本や映画の趣味が近い(猟奇・カルト系)我々であるが、パソコンまで同じメーカーであったとは……。マヌルねこさんは「君たちのような凝り性はMacか自作派だと思っていたのに、どいつもこいつもメジャー志向になりやがって」とぼやいていた。

【注】

\*1 『奇跡の海』『キングダム』『エビデミック』などの作品で有名なデンマークの映画監督、ラース・フォン・トリアーの長編デビュー作『エレメント・オブ・クライム』をもじったもの。『エレメント・オブ・クライム』とは、犯罪捜査の際、捜査者の明晰たるべき意識を犯罪者の予測しがたい精神状況に譲り渡してゆくという危険な同一化の方法。



―たまたまには私も考えろ―

## 書評 『女たちの静かな革命』

萩野 はるか

必要に駆られて、としかいいようがないほど、数年前の一時期、私はむさぼるようにフェミニズムの本を読み漁っていたことがある。

私のフェミニズム読書歴は（私の同年代の多くがそうであるように）、上野千鶴子さんや小倉千加子さんといった人たちのセクシュアリティをめぐる議論からスタートしたが、私にとつて「セカンド・インパクト」とも言えるのが、政府の社会政策を「ジェンダー」という視点から分析した大沢真理さんたちの仕事だった（大沢真理『企業社会を超えて』時事通信社、社会保障研究所編『女性と社会保障』東京大学出版会 等々）。公的年金と健康保険を事業として展開している職場に身を置いていることもあって、大沢さんの論文を初めて読んだときのショックと驚きは今でも忘れられないほど鮮明だ。

一見、性別に中立的に見える政府の経済政策や社会保障政策が、いかに男性を中心とした偏り（ジェンダー・バイアス）に満ちているのか、そして、この一見中立性を装う政策が、実はひとつの明確な家族観・男女観を前提としており、政策過程の中でそれらを制度として補強・再生産していくという事実。それを豊富な統計やデータから読みほどこいていく。

もつと具体的に言おう。例えば、日本の一九八〇年代とは、女性を「内助の功」という「銃後」に置き、男性を仕事一辺

倒の「会社人間」に仕立て上げる、という性別役割分業の徹底を社会政策を通じて強化していった時代であった。つまり、一方で女性を「主婦」として家庭に囲い込み、同時に彼女たちを弾力性に富む非常に安価で都合のよい（「パートタイマー」という）労働供給源として確保しつつ、他方で、男性を家庭の「束縛」から「自由」にすることで徹底的に効率良く働かせるというシステムづくりが進められたということだ。そして、それに積極的に手を貸したのが税制や年金制度、労働・福祉等における諸政策だったのだ。

ひとつひとつの政策の中身を検討していくと、それは驚くばかりに露骨にその意図を明らかにしてくる。ここでは詳しく書く余裕はないので、ほんの一例をあげれば、税制における「配偶者控除」の役割、或いは一九八五年の年金「大改正」における「第三号被保険者」という概念創設などはその証左だ。

それにしても、日本社会がまだまだ自信に満ち溢れ、強気だった（今では「バブル」期と自嘲をこめて語られるが）、一九八〇年代後半から九〇年代前半という時期は、まさにフェミニズムの多様な業績が次々と華々しく発せられた時期でもあった。多様な問題意識、多様な視点からの様々な指摘・問いかけは、何より私にとつて励ましであり、刺激となったと思う。

九〇年代も末になり、日本は長引く不況にあえいでいる。

今まで順風満帆としか思えなかった「大企業」が相次いで倒産し、所詮他人事だった「失業」という文字が、大部分の給与収入者にとって、非常に身近な生々しいリアリティをもつものとなった。

今年刊行された日本経済新聞社編『私たちの静かな革命』（日本経済新聞社）を改めて読み返すと、こんな時代にあつて、八〇年代後半から九〇年代前半にかけて次々と打ち出されたフェミニズムの様々な志向・視点は以前の華々しさはないものの、着実に確実に根を下ろしてきたことに確信を抱く。

本書は九八年の一月から七月までの半年余り、日経（新聞）の朝刊第一面を舞台にして掲載された同名の連載をまとめたものだ。掲載されたのが朝刊第一面という事実からして、この連載記事が単なる「アリバイ」づくりや「穴埋め」として取り組まれたものでないことを物語っている。つまり、日経が無視できないほどに、現在「女性」は非常に大切なキー・ワードになつてきているということであり、「企業中心社会」（終身雇用制度を前提とした、大企業中心の、男性中心社会）ではもはやこれからの時代を乗り切れないという危機意識が今や広範囲に共有化されつつあるということでもあるのだろう。

「経済力をつけ、多様な生き方を選び始めた女性の動きを取り込む経済社会システムに移行することが、日本の停滞を破り再生の活力を引き出す源泉になります。」（本書「まえがき」より）

丹念な取材から見えてくるのは、日本経済再生の可能性をこれまで制度の中心からスポイルされてきた女性の動きにこそ見いだそうとする取材班の熱意と、そしてまた、少なからぬ女性たちの様々な場所での様々な取り組みや動きが、結果的に「男性中心社会」の壁を内部から或いは外部から突き崩すものとなつてきているという予感だ。

紙面から伝わる女性たちの様々な分野での活躍は、まるでまつさらの布にしみが広がるように、すこしずつ、しかし確

実に広がっていくさまを想起させる。そして、この広がりにはもはや止めることも後戻りすることもできないものであることを、国内外の豊富なデータを駆使して明らかにしていく。

特筆すべきは、ややもすると少子化・高齢化とセットにして、常に否定的なニュアンスで語られる事の多かつた女性の高学歴化・晩婚化・非婚化といった現象を、価値判断抜きに論議の大前提としている点だ。女性たちの多様化を前提にした上で、『超高齢化社会』を目前にした今、私たちはどういう社会を目指していけばいいのかを問う姿勢は、ジェンダー・バイアスに無自覚でありつづける主張とは明らかに一線を画し、より建設的な議論への橋渡し役を積極的に担おうとする意志が感じられる。議論の前提となる資料も実に丹念で的確だ。その意味で、資料として、議論の材料として、本書は十分に役立つ。

しかし、読後、これからの社会は、女性にも（勿論）男性にも等しく「個」であることを要求する、ある意味で非常にシビアな世界になるだろうということを改めて痛感した。それは長引く不況の中でひりひり肌を感じる閉塞感と同根だ。男だから、女だからという、性別による理不尽な差別がなくなることは歓迎すべきことではあつても否定すべきことでは決してない。だが、今後の方向としては、依然性別による差別構造が温存される形で、更に能力による選別・差別が激化するという可能性もまた間違いなく存在する。その時には、個人の生き方・姿勢そのものが「個々人の選択の結果」として責任を要求されるという、より厳しい事態が待っていることには警戒しておく必要があるだろう。

勤続一〇年。すっかり、終身雇用慣れ切つた「リーマン」化した自分を相対化しつつ、ともかくも、今以上に自分が快適に生きていく方法を探っていくことにしよう。本書の彼女たちの試行錯誤を見習いつつ。

マヌルネコといっても、いつも本誌にくだらないことばかり書いてあるばかり者のことではない——わたしも最近絵を手伝わされたりするけど、ロリコン写真集の表紙なんか描かせないで欲しい——今回書くのは本物のマヌルネコのことである。

マヌルネコの学名は *Felis manul* でシベリア南部、モンゴル、中国西部、アフガニスタン、イランなどに生息し、モウコヤマネコとも呼ばれる。頭胴長50〜62cm、尾長23〜31cm、体重2.5〜3.5kgで野生の猫にはめずらしい長毛種だが、寒さから身を守るためと思われる。山地の砂漠、岩場、ステップ（温帯草原）に単独で住み、主に小型哺乳類などを捕食する（主婦の友社刊『ポケット図鑑・動物園の動物』より）。

「動物園の動物」とあるように、マヌルネコは日本の動物園でも見ることができ、東京では上野動物園で飼育されている。あれはもう三年ほど前、わたしと玉蟲さんとマヌルねこさん（当時はまだこのペンネームを名乗っていなかった）の三人で上野動物園に遊びに行った時のこと、パンダや象などのメジャーな動物にはあまり関心のない我々は、何の気なしに「小獣館」という建物に入ってみた。やや薄暗い館内を進むうちに、ガラス張りの檻の前で三人の足が止まった。

最初は何がいるのかよくわからなかったが、やが



# デブ猫への誘ひ

③マヌルネコ 奥沼れん



て人工の岩の間から猫らしきものがのそのそと這い出てきた。そしてこれが結構なデブ猫で、丸々とした体を引きずりながらガラスの前まで来ると、そばにあった木切れでバリバリと爪を研ぎ始めた。そのしぐさは野生の猫のくせにほとんど家猫と同じでほほえましく、我々三人はたちまちこのマヌルネコのファンになり、「マヌルねこ」のペンネームもこの瞬間に誕生したのである。

ところがよく見ると岩の上にもう一匹おり、そちらはもっとスリムな体型なのだ。当然我々はデブ猫の方は運動不足で成人病になったのだと断定し、妹の話を聞いて見に行ったら玉蟲さんの兄も「あれは病気だよ」の一言で片付けていた。しかし、いくつかの図鑑で見たマヌルネコの写真はあのデブ猫の方に近く、マヌルねこさんからは「太っている方が本来の姿では」との説が出た。そこで真相を確かめるため、何度か上野にマヌルネコ詣でに出かけたのだが、間が悪いことにいつも岩陰で寝ているらしく、最初の出会い以降二匹の姿を見ることはほとんどなかった。一度など、デブ猫の方が成人病で死んでしまったのかと心配になり、管理課の人に尋ねたほどである（その時の答は「ちゃんと二個いますよ」だった）。前述の図鑑にも「生態や生息状況など、まだよく知られていない部分も多い」との解説があり、謎は深まる一方である。

ねこのりるかの

## タイ旅行記



一〇月にととう会社を辞めた。で、なぜか「アジアリゾートに行くしかない！」と、タイのブーケット&ピービー島九日間というツアーにお友だちと行ったのだが、さすがタイは西原理恵子せんせーを倒れさせた国。大変にすばらしー国だったので、その危険度についてご報告したい。

### コテージに寝込んで溜まっつてはイケナイ

ピービー島ではとても素敵なコテージタイプのホテルに泊まった。もちろん小さい島だし、それほど設備に期待しているわけではなかったし、その小ざれいさに充分喜んでいたらわたくし二人。大変気持ちのよい数日を過ごし、明日はブーケットに帰るといふ最

後の日の真夜中、突然、寝ている私の耳の下で飛び跳ねる昆虫の気配。

んばつと飛び起きて電氣をつける。特大サイズのコキブリがあたりを徘徊。ガイドブックを片手に戦い勝利する。泣きながらゴキブリの体液でぐしょぐしょになったガイドブックの裏表紙を破り捨て、ティッシュで床を拭き掃除。これが夜中の三時一〇分。

で、それからようやく寝入って、レム睡眠に入り始めた四時ごろ、「ガサツ」という危険な音で、飛び起きると、今度は天井の梁をヤモリが歩いていて、それをネズミが追いかけている音だった。大変貴重な一瞬を見ることができた幸せにひたりつつ、その日がピービー島最後の日であったことを神に感謝したのだった。

### 「免税店」を借用してはイケナイ

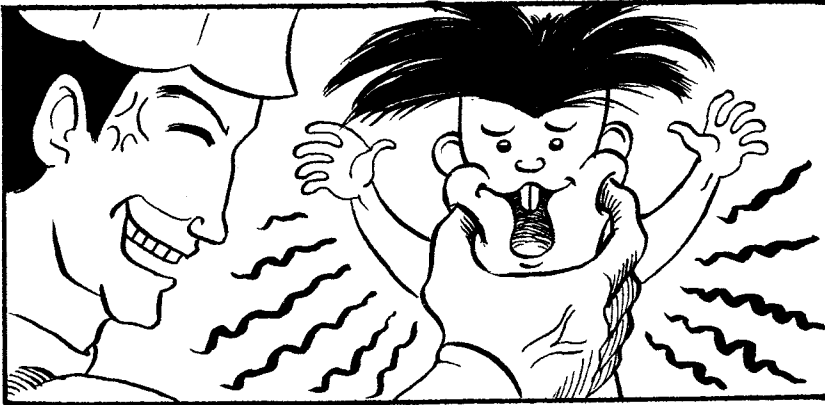
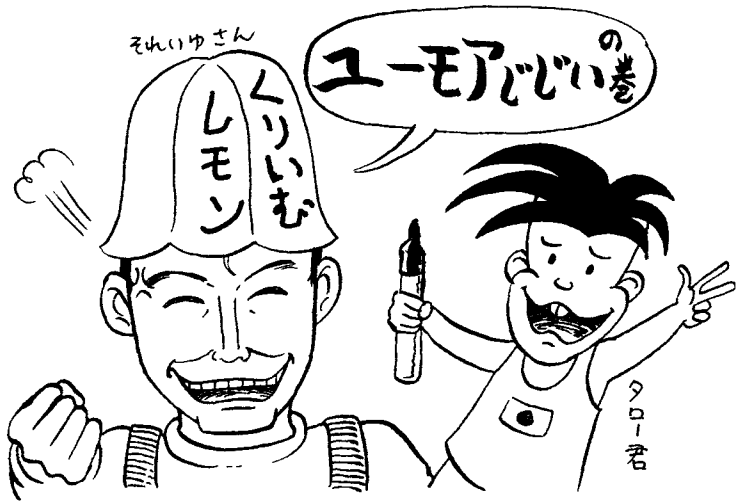
ようやく、ブーケットへと戻ってきた私たちを迎えてくれたのは、「ちよつとおみやげやさんによっていきましょー」という現地係員。まあ、これも彼の生活を助けると思つて、と、連れで行かれたのは「免税店」と日本語で書かれた店。が、タイの国産のパチモ

ン（真緑色やどピンクのプラスチック瓶入りの香水とか）や駄菓子ばかりで、税のかかるよーな高いものがおいてない。英語ではデューティーフリーではなく、ダウンタウンフリーショップと書かれている。このよーな場所に他にも私たちのよーにまぬけな日本人や欧米人がたくさん連れ込まれていた。

### ホテルのタクシーを借用してはイケナイ

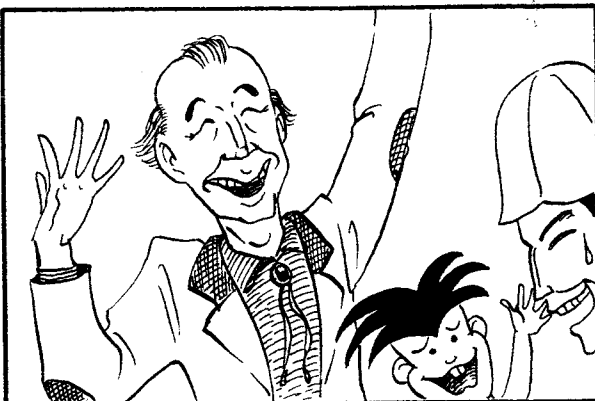
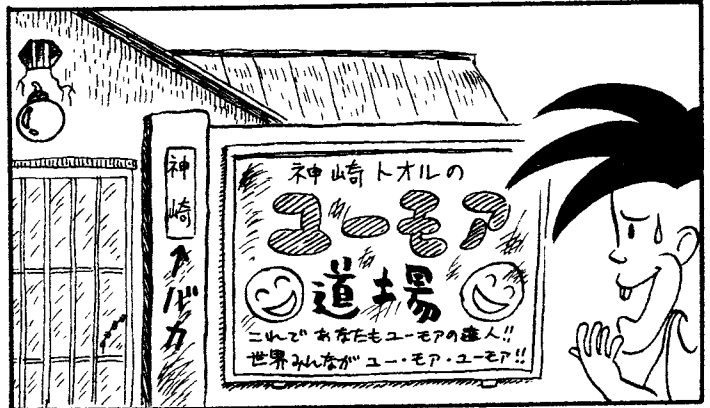
ホテルのタクシーならと、行きかかったアンティーク屋さんへと頼んだ。まずシルク屋に連れて行かれ、「違う違う」というと次に宝石屋に連れて行かれ、「違う」というと次にぜんぜん方向の違うほうに車は走り始めた。二〇分近く走り、私たちが絶望しかけた頃、「セイムショップ、セイムショップ」と言いつつ降ろされたのは新品の仏像などが置いてあるお土産屋さんだった。借用というものについて、大変お勉強させられた。

やはり日本人はもつとウソのつき方についてお勉強しなければ外交にも負けるからイケナイと思いました。マル。



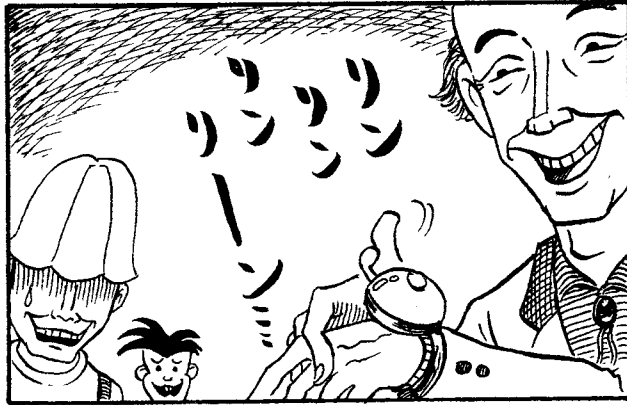
タロー「こんにちは。連続少女誘拐未遂事件の重要参考人、ロリロリそれいゆです」  
 それいゆ「こちらタロー君、言っている冗談と悪い冗談があるよ」  
 タロー「今のは言っている冗談だよ……おごほっほ」

それいゆ「あれはあの後すぐに真犯人が捕まって、ほとんどの容疑は晴れたんだからね。どうもタロー君はユーモアのTPOというものがわかっていないようだから、これからユーモアの達人と呼ばれる先生の所へ行って修業をしよう」  
 タロー「(独白) おいおい、今どき『ユーモア道場』? やめてくれよお」



神崎「どうも最近では弱い者いじめや下ネタばかりで人を笑わせようとする傾向がありますが、そんなものはユーモアではありません。本当のユーモアとはもつと心が温かくなるものです。これから私の道場でしやれたユーモアセンスを学んで、この殺伐とした世の中を明るくしてあげましょう。さあ皆さんと一緒に You more humor!」  
 タロー「皆さんって、ほんとそれいゆさんしかいないよ」





神崎「これは私が発明した『リンリンリスト』です。人の後ろからベルを鳴らして、自転車だと思つて振り向いた人と顔を見合わせアツハツハ、というわけです」

タロー「このじじい、頭にブリオンでも涌いてるんじゃないの？」

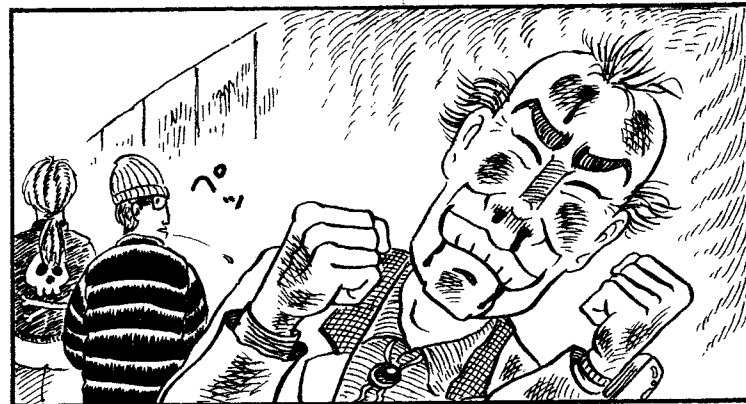
それいゆ「しっ。いきなり核心を突いた事を言ったらだめだよ。ぼくもここに来たことを早くも後悔しているんだから」



神崎「それでは実際に試してみましよう」

タロー「できるだけ離れて歩こうよそれいゆさん」

神崎「(ベルを鳴らしながら)リンリン。通りますよー」



それいゆ「……いきなりハズしたね」

タロー「あれで笑う方がどうかしているよ」

神崎「ギギギ……こんなはずじゃ……(気を取り直して)いいですか、どんなにイキでしゃれたユーモアでもTPOを誤るとこのようになりますので注意しましょう」



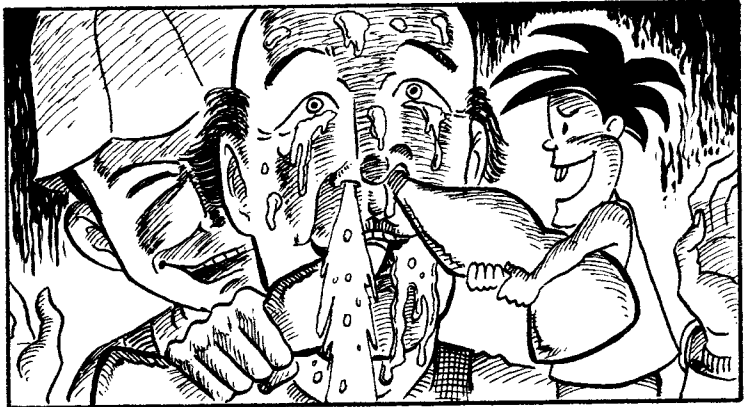
神崎「あそこに行く知的な女性ならば私のユーモアセンスをわかってくれそうだ。今度こそ大丈夫……リンリン。通りますよー」

わらわらわらっ

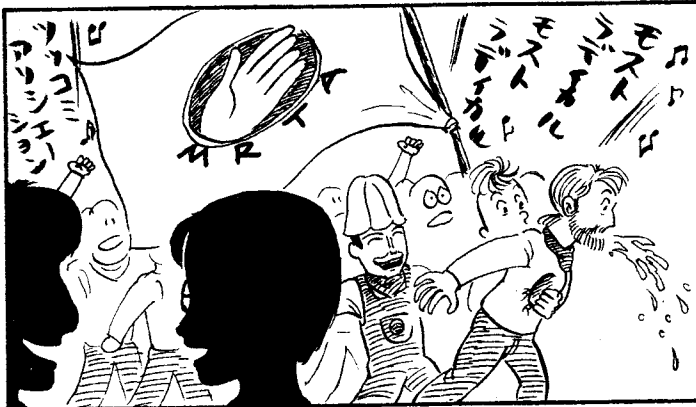
それいゆ「あ、あなた方は？」  
 代表「我々は『モスト・ラディ  
 カル・ツッコミ・アソシエー  
 ション』、略してMRTA。し  
 らけるギャグをかます奴等に苛  
 烈なツッコミを入れるのだ」  
 それいゆ「ああっ。あんた確か  
 葛飾公安協会のリーダー……」  
 代表「いや、私はそのような者  
 は知らん。人違いだろう」



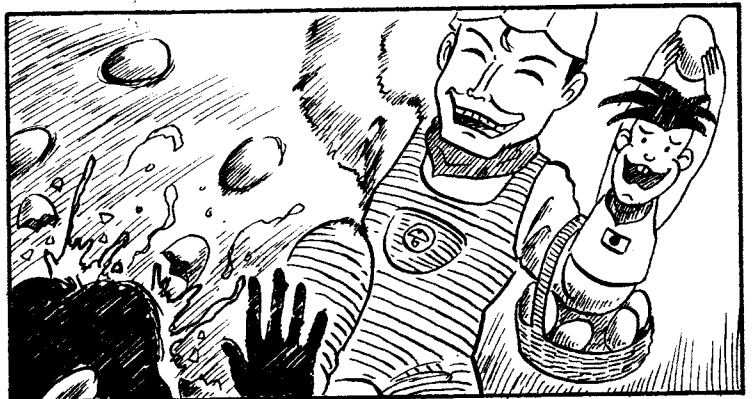
タロー「それいゆさん、こつち  
 と組んだ方が面白そうだよ」  
 神崎「さ、君たちにはこの知的  
 ユーモアがわからないのか、リ  
 ンリン」  
 代表「まだ言ってるな。やれ」  
 それいゆ「それいゆ、マヨネ  
 ズ2本行きまーす」  
 にゆぶるびゆつ



(MRTAの歌)  
 つまらんギャグには容赦なく  
 正義の鉄槌振り下ろせ  
 嵐の肅正あらばこそ  
 笑いの園にも花咲かん  
 女性A「あら、何かのデモで  
 しょうか？」  
 女性B「しょうかい？ デモ、  
 ちよつと違うみたいね」  
 代表「うべろっ。あまりのくだ  
 らなさにゲロってしまったぞ」



それいゆ「よーし、それいゆ、  
 マヨネズ2本……」  
 代表「待て。そんなもんじゃ甘  
 い。腐った卵1ターズとチャド  
 クガの幼虫行け」  
 それいゆ「♪わったつっはミ  
 ネソタのくたつまつこつうつり  
 っ月」  
 すばばばぱんつ



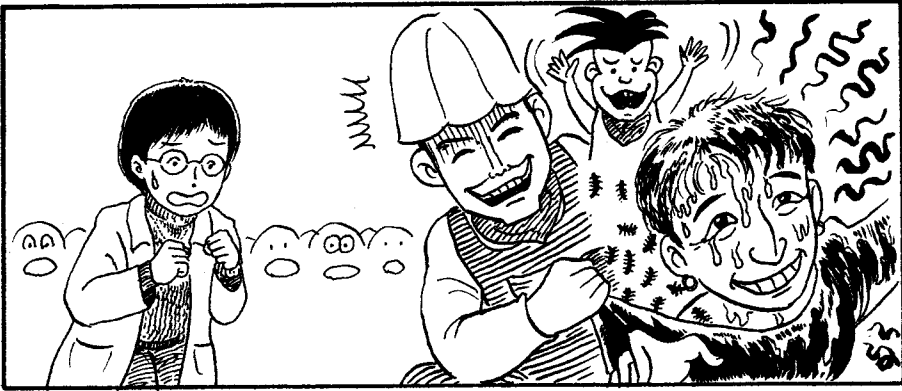
タロー「毛虫はいらんかえ〜」

わささささささ

女性B「ひいっ」

女性A「お、荻野先生っ」

それいゆ「え？」



# 荻野アンナさん、襲われけが

## MRTA再活動？

三日午後三時ごろ、港区六本木二丁目の路上で、芥川眞作家で慶応大助教授の荻野アンナさん(四三)が暴漢に襲われた。通行人の一一〇番通報で六本木署員がすぐにかけてつけたが犯人たちは逃走した後だった。荻野さんは背中などに三週間のけが。

一緒に歩いていた編集者の女性によると、「MRTA」と書いた旗をもったグループが歌を歌いながらデモ行進をしていたが、荻野さんがそれを見て冗談を言ったところ、そのうちの一人の男がいきなり隊列を離れて荻野さんに襲いかかり、「ミネソタの卵売り」を歌いながら腐った卵をぶついたり背中に毛虫を入れたきたという。男の特徴は身長一

六五センチくらいで年齢は三五歳前後、つねに笑顔で左手には人形をはめ、チューリップハットをかぶっていたという。また、デモ隊はひげをはやした四〇歳くらいの男が先導していたという目撃証言もあり、六本木署では二年前のペルーの日本大使館占拠事件でセルバ代表以下一四名を射殺されたMRTAが再び活動を始め、報復テロを行なった疑いも否定できないとして、逃走した犯人たちの捜索に全力をあげている。

ノーベル文学賞作家の大江健三郎さんの話 荻野さんのユーモアはとてどもディーセントで日ごろから愛読していただけにとても残念だ。このようなまともな神経とは思えない、

卑劣なテロ行為に対しては激しい怒りを覚える。私自身も以前、テロと脅迫にあつたし、「悪魔の詩」の翻訳者が殺害されたこともまだ記憶に新しい。全世界の作家は言論への暴力に対する毅然とした態度を失ってはならない。

コラムニストの中野翠さんの話 報道だけではよくわからないけれど、どうせまた死ぬほどつまらないダジャレを言ったんでしよう。だとしたら自業自得ですね。

アルベルト・フジモリペルー大統領の話 ペルーには、たとえゲリラであつてもそこまでするバカな人間はいない。何かの間違いだろう。

タロー「うひゃほ、それいゆさん、二回連続新聞ざたなんて絶好調だね。今回はさすがに現行犯だから当分外を歩けない……うわつぶ、苦しい。何をやるのそれいゆさん」  
それいゆ「『今回は』とはどういう意味だい。前回は冤罪だったって言ってるだろう」



## From Editor Jane

12月の終わりになって、銀杏がその黄色い葉を落とし、ようやく冬らしさを感じるようになってきました。

それにしても、この銀杏並木といい、冬とは思えない日差しの強さ暖かさといい、ここ数年の東京の天候には驚いてしまいます。「銀杏並木=晩秋」という図式は、もう随分昔の話となったようです。

さて、今年最後のCRAZY JANEです。いかがでしたでしょうか。

この一年もあと残りわずか、ということになると、思わずこの一年を振り返ってみたりします。でも、今年は私自身としては、なんだか身も心も「温暖化現象」という感じで、特記できる事があつた訳でもなく、安逸な毎日の暮らし（と酒）で、ついに脳味噌が壊れてきたかな、と心配になってきているくらいなものです。

来年はもう少し、毎日の暮らしに気合いを入れて、ひゅうひゅう音をたてている脳味噌に栄養をやらねば、と考えてはいるのですが…。こういうことを考え出しているのも、「年末」という時期の為せる業なのかもしれません。

来年はいよいよ1999年。「世紀末」もいよいよラストスパートです。あつという間に流れる月日。あとで自分のし残したことの多さに呆然とすることのないよう過ごしたいものです。

と、年賀状代わりに後書きでした。

(ogino)

CRAZY JANE 第Ⅲ期 Vol. 16  
1998. 12. 23

名義『クレイジー・ジェーン』